

【講演記録／「東亜同文書院の 45 年、愛知大学の 70 年」浜松講演・展示会】

## 近衛家と東亜同文書院、そして愛知大学

愛知大学名誉教授、元愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 **藤田 佳久**

(2017 年 7 月 11 日、クリエート浜松)

### 1. はじめに

ただいまご紹介いただきました、愛知大学名誉教授、元センター長の藤田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今日のテーマは「近衛家と東亜同文書院、そして愛知大学」というタイトルであります。こういう展示・講演会は東京、横浜、名古屋、京都、広島、福岡、シカゴ、などの大都市あるいは、東亜同文書院に関係した弘前、富山、長崎、熊本、那覇など 17 カ所で、これまでいろいろやってまいりました。それぞれちょっと特徴を出しながらやってまいりました。今回のチラシ（図 1）の下は、近衛家の書であります。この近衛家が本学とどんなような形で関わっているのか、いうところが私のテーマの特徴であります。



図 2 大学キャンパス模型（左上）とセンター内部

にくいかもしれませんがその一番下のところに、白塗りの建物が愛知大学東亜同文書院大学記念センターが入っている記念館でありまして、昔の第 15 師団の司令部の建物であります。そのこの辺りのところに、昭和天皇が、皇太子時代に、ここへ来られたときの記念碑と植樹された松があります。道の反対側には久邇宮の碑と植樹された松があります（図 2、上の中央と右）。15 師団の師団長として皇室がここへ来たのは初めてなんですけど、その久邇宮の碑であります。これは久邇宮御一家の写真で、テラスにおられる娘さんが良子さんです（図 3）『愛大公館 100 年物語』より。

この久邇宮の師団長在任中に良子さまが昭和天皇のおきさきに決定したという報道がありまして、その時代、豊橋にお祝いのフィーバーがあったわけであります。道路を隔てて、そのお 2 人の碑が並んでいるのです。しばらく歩くと本館の正面があって、これが今、われわれも入っています東亜同文書院の記念センターです。大学としては大学記念館、いう

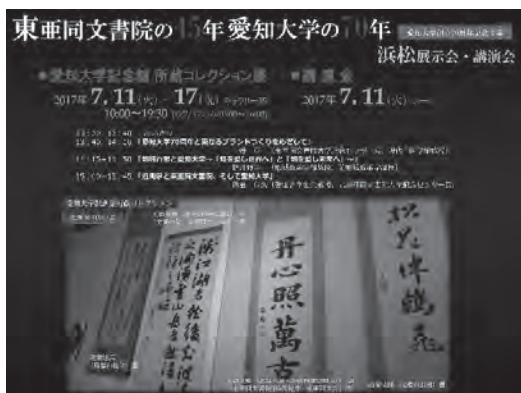


図 1 浜松展示・講演会用ポスター

### 2. 愛知大学東亜同文書院大学の紹介

まずはわれわれの記念センターの紹介です。図 2 の一番左上は模型です。ちょっと分かり



図3 久邇宮殿下邦彦王一家。右から2人目が久邇宮殿下。前列左から2人目が良子女王

ことになってまして。内も外も、もうほんとにレトロです。外壁面はドイツ風であったり、下のほうのレンガがイギリス風であったり、中に入りますとこういう、ちょっと彫刻があったりして、ギリシャローマ風な建物で、豊橋では最初の洋風建築であります(図2、下3枚の写真)。宮大工や大工の人たちが総動員で1年間で作ってしまったという建物であります。この建物には通し柱がありません。1階の上に2階が載ってるんです。結構、今はそういう建物が見られないんですけど、これまでの110年間に伊勢湾台風とか東南海地震とか三河地震にも耐えてきた建物でありまして、こういう建築法は、今日、もう1回見直したら、それなりに価値があるのかなという気がします。これは内部の、天井の高い廊下と部屋で、落ち着いた感じの建物です。

この展示施設の展示物は、今回もだいぶ浜松のこの会場に持ってきたものですから隙間だらけですけど(図4、上)、こういうようなぜいたくな空間の展示です。下の写真は、いろんな見学者のシーンです。これは中国からの研究者のグループですが、日本の研究者、から欧米の研究者や学生、台湾とか中国から修学旅行生。もちろん、うちの学生諸君の入門ゼミの説明会とか、中学生が色々な学校から来たりとか、とにかく多彩な団体が来ます。最近ではJR さわやかウォーキングのコースに



図4 東亜同文書院記念センターへの参観者

も選ばれ、2年続けて2,000人ぐらいの人たちがやってきたり。普通の日でも結構、遠隔地からお客さんが来るようになりまして、記念センターの名前が充分知られるようになったのじゃないかなと思っております。

その中に、いろんな書院の展示品がありますが、東亜同文書院以外のもう一つの目玉は、書院と関係しますが、書院の卒業生である山田良政とその弟、純三郎で孫文の秘書役としてつかえたことによる孫文関係の展示です。その孫文の秘書役をやったときに多くの資料が集まった。弘前出身の兄、山田良政が、南京にできた南京同文書院の職員であったときに、東京で孫文と出会ってオーラを感じ、孫文派になってしまったのです。孫文があとで一斉蜂起を呼び掛けたときに馳せ参じて、戦死してしまっただけです。孫文はその後、革命が成功したあと、この良政をたたえて、慰霊祭を催し、揮毫を書いたのです。孫文は字を書くのが好きで、これは一つの募金活動でも



図5 山田良政(円内)と純三郎・孫文

あったと思います(図5)。

その良政の弟さんが、この写真のうち孫文の左側の純三郎です。実質的に孫文の秘書をやったわけです。そのときに多くの資料が集まって。その息子さんが順造さんで、書院を卒業されて、お父さんのそういう資料をベースにして孫文図書館を作ろうとしたのです。しかし、晩年になって体を悪くされて、もうできないということで愛知大学へ一括寄贈していただいたのです。今回、この3階の展示室のほうに、その一部を展示していますので、この講演会が終わりましたら、あるいは明日から1週間展示を開催していますので、ぜひ、ご覧になっていただきたいと思います。書院と、この孫文関係、そして次は戦後の愛知大学史ですね。そのあたりが中心の展示で、力を入れています。大学の記念センターでは、今後、卒業生で画家の平松礼二さんとか東松照明さんの写真等の作品も展示するという予定が進行しております。それは秋以降の話であります。

その書院関係の最初のところで、近衛家の4代の書が掲げられています(図6、7、8)。この画像の写りが悪いですが、一番左側が近衛篤磨のおじいさん忠熙の書であります。近衛篤磨公は小さいときにお父さんを亡くしてしまい、そのためにおじいさんが近衛公を育てたのです。それから、この右側、近衛篤磨公の書であります。漢文調で書いてありますけれども、湖を渡って振り返ると、なんと波が荒れていたことか、また山に登って振り返ってみると、なんと急峻な山だったんだろうかと。そういうようなことを書いてあります(図6)。これは文磨さんの書です(図8)。篤磨公の息子さんです。戦争中の総理大臣であります。それから、こちらは、シベリアに抑留されて亡くなってしまった文磨の息子の文隆さんです(図8、左)。文磨さんの長男の揮毫で、端正ですが、やわらかな文字ですね。



図6 近衛篤磨と近衛家4代の書

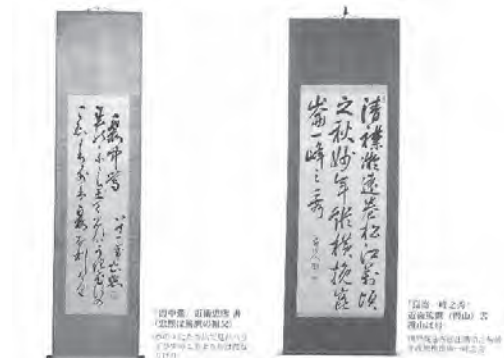


図7 近衛忠熙(左)と篤磨(右)の書



図8 近衛文磨(右)と息子文隆(左)の書

これはおじいさんの忠熙の書です(図7、左)。春の野に出たら、霞が非常にかかっている中で鶯の鳴き声のみ聞こえるというような風景を詠んだものです。こちらは近衛篤磨公の書です(図7、右)。ここに、いくつか地名がみられます。松江は上海のウ・スンってところがありますが、そこの辺りの川を詠んだ秋の景色です。2行目行きますと、少年とは年が若い子ですかね。若い子ではあるけれども才能が非常に豊かであって、崑崙(コンロン)の一番高いピークのような形だという意味です。

これらの書の原文は、ご自身で全部作ったわけではなくて、「酔古堂劔掃」という本の中から取ったものが、ほとんどであります(図9)。「酔古堂劔掃」というのは、これはのちにこういう名前で付けられたようだけれど



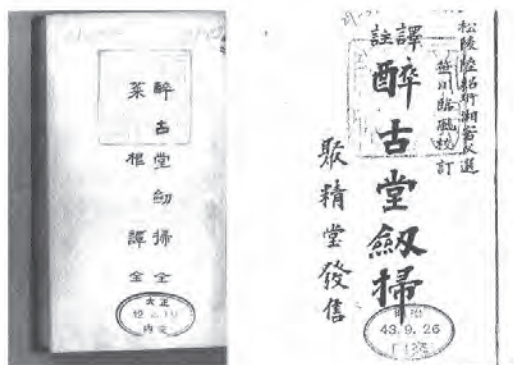


図9 引用された書籍の表紙

も、明の時代に、いろんな人生の役に立つ名言が集められて出版された書物です。肝心の明、あるいは、それ以降の中国では、ほとんどやらなかった。日本では江戸時代に、これがもたらされて、幕末から明治のころ、爆発的とはいってもないのですが、文人の間で非常に広がった書物です。全 10 巻あります。日本の古書店、古本屋で調べますと 10 万円していました。非常に高い値段なんですけれども、その中でご自分の気持ちに合う名文を、こういう形で揮毫にして掲げたということで、ご自分の一つの思いが、ああいう書の中に込められてるんだろうというふうに思われます。

### 3. 各地で行ってきた展示・講演会

これらの展示会では、いろんな人にも講演者として来ていただきました。これ、アンパンマンのマンガ家であるやなせたかしさんです。これは福岡の講演会のときの様子であります（図 10）。やなせさんはこの頃、体が悪くて、だいぶ心配したのでありますけれど。



図10 やなせたかし氏の講演風景（福岡）

東京から飛行機で福岡へ来ていただいて、再び飛行機で、すぐ帰っていただいたのです。アンパンマンがどういうふうな形でエネルギーを与えてくれたのか、というようなお話をさせていただきました。約 200 人ぐらいの人に聞いていただいたのですが、なんと初めて知ったのですが、この方、歌を歌われたのです。4 曲ぐらい歌っていただいたのです。

次の写真の、右の縦下 2 枚は、愛知大学東京事務所移転、開設記念の時に、事務所も入っている霞山（篤磨公の雅号）ビルでの展示会と講演会の様子です（図 11）。もともと東京事務所は東亜同文書院卒業生の会「滬友会」とともに、この霞ヶ関の霞山ビルの中にあつて、その霞山ビルが壊されて文部省のとなりにつインタワーができて、その 37 階に引っ越したのです。その記念で、記念センターが展示会をやったということなのです。船戸与一という作家が『満州国演義』でした、本を書かれて、第 1 冊が出た直後だったので、非常に沢山の人が集まりましたのです。左上のほうは、こういう展示会の準備中の風景であります。今日、3 階で見させていただきますと、こんな工程があつて展示を進めてきたということが、おわかりいただけると思います。

そういう方々には、講演していただいた内容を記念センターでブックレットとして出版していただいています。左のほうのブックレットは先ほどの『満州国演義』見る中国大陸』



図11 東京・霞山会での船戸与一氏の講演風景



図12 船戸氏と安彦氏の講演ブックレット

のテーマで船戸与一さんの作品。右のほうは漫画で描こうとした中山優中心の大陸での日本青年の物語で、安彦さんの作品ですが、安彦さんはガンダムの絵を描いてる方です。随分、この本はヒットして販売されました(図12)。

このように、全国各地でこういう展示会をやってまいりました。これまで17カ所です。それぞれ、こういうチラシを作って。あるいはポスターを作って展示をしてまいりました。そのうちの一部であります。右のほうの図はそのチラシです(図13)。開催地は全国各地の、書院といろんな由緒ある土地を選びました。一番下は弘前のチラシです。弘前は先ほどの山田良政の出身地です。福岡とか長崎、この辺は書院の入学生が非常に多い県です。今回は特に理由があってではないんですけど、今まで名古屋以外は東海の地でやったことがありませんでしたので、ここ浜松でやらせていただいたということでもあります。



図13 記念センターの各地での展示・講演用ポスター(一部)



図14 近衛篤磨公(30代頃)

#### 4. 近衛篤磨公のヨーロッパ留学

改めて、何度も同じような写真が出てきますけれど、これは近衛篤磨公であります。この方は残念ながら早く亡くなってしまいます。これは、30代のころだと思います。体の立派な方であります。その後の文隆さん等を見ていますと、ちょっとイメージが違うのですけども。この方は小学校へ入る前から、家庭で修行しますが、小学校時代、英語塾で勉強をした。その英語の先生が授業をやる前に相撲をいつもとっていたと。相撲をやることによって体力をつくった、というような記録が残っています。30代のこのころですけど、今で言うと、やっぱり肥満であるということを非常に気にしていて、なるべく散歩をするとか甘いものを控えるとか、体には非常に気を遣っていたようであります。

家系図であります(図15)。一番右上のほうまで行きますと、ちょっと読みにくいのですが、藤原釜足までさかのぼることができます。途中で近衛というのがポジションになり、それによって近衛という名前に変わります。だけど、本名と言いますか、もともと



図15 近衛家の系図(写真は篤磨と文磨)

の姓は、藤原ということになっています。この歴代の多くの方々はともかくとして、これが一番最後の方で、先ほど言いました。忠熙さんで、おじいさんであります。それから、その息子さんが、篤磨公の父ですけど、残念ながら早く亡くなってしまいうわけですね。今度は左が篤磨さんです。その下が子の文磨さん。その息子さんの文隆さんと通隆さんです。

とくに書院設立にからんだ篤磨公の写真を探していたのですが、これが一番いいかなということでもらいました(図16)。一番右上から、少年時代です。もう、このころ英語を勉強していた。だから語学力は結構あったのです。それから真ん中が青年時代で、これが明治の21年と書いてありますから、ドイツへ留学した頃です。こちらは貴族院の議長をやっていたころの写真です。左下は、2度目にヨーロッパへ行ったときの写真であります。これ以降は、もう亡くなってしまって、画像が存在していないのです。

近衛さんの非常に特徴的なことは、明治18年4月から23年の9月までの留学です。『近衛篤磨日記』に書かれていますけれども、やっぱり英語をやったせいか、ヨーロッパへ留学したい、と政府へ願ひ出る。そして最終的



図16 近衛篤磨各時代の人物像

にオーストリアに決まります。プリントの後ろのほうに、そのコース図を載せておきましたので、それもお覧になって下さい(図17)。当時は船旅であります。パナマ運河を通してフランスのマルセイユ。そこからパリへ行って、ボン。そこから、イエナです。この辺りで、今で言うとなんでしょう？ホームステイですかね。そういうことをされて、ドイツ語を学び、やがてボンへ戻ってボンの大学に入ります。そしてライプチヒ大学へ行くわけですけど、最初はボン大学で勉強しようと思っていたのですが、彼が記した『近衛篤磨日記』によれば、ボン大学は当時のドイツで言うとアッパークラスというのですか、貴族階層の子どもたちばかりが集まっています、もう勉強せずに遊んでばかりいるので、最初は懂れて来たボン大学だったのですが、こういう中では自分は勉強できないであろうということで、日本の本部に連絡を取りライプチヒ大学に行ったのです。ライプチヒ大学



図17 第1回ヨーロッパ留学へのコース



は日本で言うと京都大学みたいなところなのです。古い都の中にある大学でありまして、こちらはボン大学と比べるとかなり研究、教育が熱心であるので、ライプチヒ大学に決めたというわけです。留学年数は合計6年にも及ぶわけですが、そこへたどり着くまでに、数年かかっているわけです。

そこで何をやったかという点、卒業論文の研究作成ですが、当時の卒業論文は、今で言う博士号クラスのレベルで、その学位論文を書いた。タイトルは『国務大臣責任論』と言います。この原文を見たいというわけで、私は国会図書館にアプローチをして、そこに1冊だけ、もうボロボロですが残っているのを見つけました。残念ながらコピーが取れないのです。そこで私も、少し写してみたりしたのです。

この学位論文には近衛篤磨公が、どなたかに寄贈しているサインが記されています。ということは、つまり印刷・製本版になって何冊かもらって帰国をされたのでしょうか。そのうちのどなたかに寄贈した1冊が国会図書館に所蔵されていました。目次を見ると、日本のことが書いてあるのです。政治体制史。一番最初は貴族社会における一種の、大ざっぱに言うと法体制というものですかね。お役人の役割とか。その次が封建時代。江戸時代のあたりです。明治以降は絶対主義時代と書いてありました。だから、その3つの時代の中で日本の、こういうトップクラスの人たちが、どのような責任を果たしていたのか、果たしてこなかったのか、ということを実証的に展開しています。一番最後の次に第二部がありまして、そこでは出来つつある日本国憲法。明治憲法ですね。明治憲法の中でも国務大臣は責任を持たないというようなことを、どういう形で明らかにしていってらよいのか、というような、ちょっと応用問題でしょうか。そういうようなことに触れた論文です。全部、独学のドイツ語で書かれています。

ドイツ語はドイツ行ってから初めて勉強した。先ほどのイエナはライカのカメラ生産で有名なところ。そこでのホームステイのときにドイツ語を勉強して、ボン大学、それからライプチヒでも勉強して、ドイツ語で学位論文が書けるようになったのです。そういう非常に志というか志向性が高いレベルで、留学されたのですね。彼は小学校は卒業していますけれど、次のステップの学校へ行ったときに体を悪くして、ずーっと休学していたのです。学校では勉強ができませんでした。だけど英語だけはやってた。一通り英語を学び、あるレベルまで来たときにアメリカかイギリスへ留学したいと政府筋に相談した。そうしたら三条実美が反対したのですね。当時、明治政府のトップたちはかなり反対したそうです。その理由は、アメリカかイギリスへ行ってもらって、いわゆる今流に言うと、民主主義的な精神を勉強してきて、自由民権運動に加わるなど、それを日本に流布されては困るというようなことを言われたのです。しばらくは留学話は中断したのですが、先ほどの英語塾の先生も含めて応援があり、オーストリアやドイツ（プロシア）は皇帝の国であり、明治政府の国体に似ているということで、そこへ行くならというわけで許されて行ったのです。この学位論文のスタイルや内容を見ますと、ドイツ流の観念論的なというよりは、一番政府が嫌っていたイギリス流の実証主義的な側面で学位論文を書いている、というところに篤磨らしさがみられます。

このような形でヨーロッパで勉強をして、その途中でパリ、それからロンドン、さらにスイスでは、ヨーロッパアルプスの山々を踏破しているんです。そのときは自分の弟さんたちも留学に呼んで、一緒に登ったりしているのです。あと、ほかの大学や歴史的な場所にも非常に関心があった。そういうヨーロッパの旅行を通して、この近衛さんの基本的なものの考え方を形成したという気がい

たします。

## 5. 荒尾精と日清貿易研究所

一方、そうしている時期に今度は荒尾精の話です。荒尾精は尾張藩の武士の息子でありましたけれども、明治維新になって父親が失業して東京へ出てきて荒物屋の商売をやりません。けれども、失敗してしまう。そこを麹町の警察署長に救われて、書生になって、初めて当時、問題になっていた朝鮮半島とその背景にある清国という世界を知って、目が切り開かれていくわけですが、その過程の中で、どうしても清国へ行きたいと思うようになります。とくに朝鮮の背後でコントロールしている清国ってどんな国であろうかということで非常に関心を持ち、それと情報として入ってくる清国の情報。そういう中で清と日本がどう付き合ったらいいのかみたいなことを現地で観察したい、というわけです。しかし1人で行っても、そう簡単には入れない国です。すでにそのときに、上海に入っていました岸田吟香を訪ねるのですね。彼は岡山県、美作の国の出身ですが、細かいことは省きますが、この人が目を悪くして、横浜に来て開業していたヘボンへ訪ねていったら1週間で目が治った。非常に感激するわけです。それに、この岸田吟香は、武士ではありませんでしたが、いろいろ幕府に狙われたりして脱藩をしますと言いますか、武士を辞め、いろいろな職業を経験するわけです。その彼が知っている、いろいろな言葉が、ヘボンが編集中の和英辞典に全部使えるというわけで、ヘボンは彼をかわいがって日本語のコレクションの材料にするわけです。日本語をほぼ編集して、活字にするというときに、日本には印刷所がありませんでしたから、上海へ連れて行った。そこで彼は自由人としても振る舞って、上海人から、ものすごく人気を得るわけでありました。その彼がやがて日本へ帰ってきて、日本最初の新聞を発行したり、蒸気機関



図18 岸田吟香（青年、晩年）と愛大のロゴ

の会社を作ったり、社会事業をやったりとか、新聞記者になったりとか、もうありとあらゆる仕事をやった後、もう1回上海へ行って、ヘボンから目でみて学んだ「精鍔水（せいきすい）」という目薬の技術を得て販売し、大儲けするわけです。当時の清国の医療事情は悪かったからです。だから彼のことを国際商人第1号って言ったらいいんですね（図18）。

荒尾精はその彼を訪ねて行って、彼からいろいろ、当時の清国の様子を聞こうとしたのですが、吟香からは本気で清国を理解する気があるのかどうかということ問われ、何度目かに訪ねた時、手元にあったピストルで近くの花瓶を撃って、このぐらいの決意でありますと言って見せたのですね。そこで、岸田吟香はそれではというわけで彼を受け入れてくれたという話が当時の刊行本に書かれてあるのです。これが本当なのかどうかは分からないのですが、そういう形で岸田吟香にお世話になったのです。これは、ちなみに岸田吟香像です。

息子さんは、岸田劉生と言いますけれど、この「麗子像」で有名です（図19）。その岸田劉生のお弟子さんが豊橋にある書店の、豊川堂（ほうせんどう）の高須さんです。高須さんがこの愛大（あいだい）のロゴを作ってくれたのです（図18、右）。だから僕は愛知大学のロゴが、今は簡単なアルファベットの「A」と、簡単な三角形で済ませていますけど、こちらのほうがはるかに歴史的なストーリーがあるという点で、このロゴを使ったほうが







図 21 日清貿易研究所の卒業生

21)。最初は 150 人ぐらい留学するのですが、途中で荒尾精は得られるはずであった資金の予定が得られなくなってしまって、金策にものすごく苦勞するのですね。それを知った卒業生が辞めたり、あるいは上海で脚気にかかったりして、半分ぐらいが辞めてしまうのです。あと半分は残って、卒業まで頑張った。なかなか有能な人たちが、ここから誕生します。ところが、この直後に日清戦争が起こって、半分ぐらいの人が通訳として軍隊のほうに入れられてしまうのですね。そこで有能だったのに亡くなった人たちが結構いたから、荒尾はのちに彼らのために思って、京都東山へ引きこもってしまうのです。

## 6. 近衛篤磨公と東亜同文書院

これは、ちょうどその頃、今度は同時並行で場面が変わります。今度は近衛篤磨公が北海道へ行っています。明治 25 年です。彼はよくこうやって動くのです。函館からずーっと行って、この内陸部の一番中心、上川町ですね。当時、この辺ぐらいしか行けなかった(図 22)。明治 25 年の頃には、北海道には広大な農地があり、資源がある。これをなんとかしなくちゃいけない、いう発想も彼は持つわけです。これはのちに対露、ロシアとの関係でもって、北海道をどういうふうに扱っていったらいいのかというような構想とつながっていきます。

その後、明治 32 年になりますと、篤磨公は今度は世界一周するわけです（図 23）。これがまたすごいですね。ハワイへ行ってカリフ



図 22 篤磨の第 1 回目の北海道コース



図 23 篤麿の第 2 回世界旅行コース

オルニア、サンフランシスコからニューヨーク。そこから、イギリスロンドンへ、パリ、モスクワまで行っていますね。そのあと、マルセイユから帰って、コロンボ、シンガポール、サイゴンです。そして上海から清国の中へ入って日本へ帰ってきました。その最後の部分だけ拡大します。

これがそうです。マカオから香港そして、上海です。そこから南京へ行ってさらに武漢へ（図 24）。南京では当時の、この辺の両総督府、いくつかの地方を管理している総督府です。劉坤一（リュウ・コンイツ）という人



図 24 篤麿の華中訪問と北清訪問コース

に会って、近衛はヨーロッパからずーっと見てきた世界の中での清国の位置づけを説くわけです。それには、基本的には日本と清国との間で文化交流事業をもっと活発にしたほうがいいと提案するのです。この時代は日清戦争に日本が勝ったあとでしたから、なぜ清国が負けたかという、劉坤一も日本が非常に近代化を急いだ成果が出ているのだと理解していたのです。だから、その点で言うと、日本の戦前と清国の戦前を一緒に勉強することは非常にいいと。すると、じゃあ、「すぐ留学生を送る」と言い出したのです。もう1人、張之洞（チョウ・シドウ）という総督が武漢にいますが、篤麿公は張のほうがちょっと意識が低いかもしれないと書いてあります。しかし、留学生を送る熱意は十分で、彼からの同意も得て、南京に日清で共同の学校を作りましょうというのが約束されたのです。しかし、その学校ができる前に、張は息子をすぐ日本へ送りたいと言うので、篤麿は東京へ帰ったあと、すぐに張の息子を学習院へ受け入れています。そして、目白の邸宅の一部に建物を建てて、東京同文書院を作るわけです。

これが目白にできた東京同文書院であります（図 25）。これは、われわれ記念センターとしても、長いこと幻の学校でありました。よく分からなかったのです。

それを保坂さんという中央大学の附属高校の先生が研究をしていた。これ、なぜかというと、中央大学の附属高校が高校の歴史を作るときに、保坂先生は学校から頼まれたけれ



図 25 東京同文書院校舎（目白）



図 26 講演する保坂氏(左)とセンター関係者と(右)

ど、学校の金でやるのはいやだから、自分でお金を出して興味のままにやったら、行きついたところが目白中学だったというのです。ところが、その目白中学の隣に東京同文書院という看板も一緒に立っていた。一体これは、なんだということで東京同文書院の研究に入られたのです。そういうお話をチラッと聞いたのが、この右から2番目の成瀬さよ子さん（図 26）という当時の愛知大学豊橋図書館の司書の方でして、書院史にも非常に興味持っておられた方です。その方を経て、講演に来て熱く語っていただいたのです。非常にシャイな方なもので、おしゃべりするのは、もう初めてで、あんまりやりたくないというようなことだったのですが、丁寧な講演でした。その功績が大きいということで東亜同文書院記念賞をのちにもらっていただいております。

この中で、非常に有能な当時のトップレベルの先生たちが清国から次々来る学生たちに教育をやっている。のちには、ベトナムから、当時の安南ですね。独立を目指す若者たちが、ここを拠点にしようというわけで東京同文書院に次々と来たのです。しかし、このことはフランス側には面白くなく、フランス植民地の反乱ですから。そこで、フランスと日本政府の協約とでも言いますか、フランスは安南、東南アジアを自分たちのものにするから、日本は朝鮮半島を自由にやってもいいような案がフランス側から提案されて、それに日本政府が乗ったために、ベトナムから来た留学生たちは一斉に追い払われてしまいました。噂が流れてきた情報ですと、帰国したら家族もろとも、みんな殺されてしまった、というよ



うな話を聞きます。その中でファン・ボイ・チャウがリーダーでありまして、その人がベトナムの戦後の独立の原点を作ったついで、ベトナム政府が、近年、この東京同文書院、そこでいろいろそれを支えた篤麿と、寮長でベトナム人の面倒をみた柏原文太郎や浅羽佐喜太郎などを顕彰しているのです。現在そういうようなところにつながっていくわけです。こういう話をすると時間が経ってしまっていますが。

そして、そのころ東亜会と同文会など日清戦争のあと、アジアをめぐるグループがいくつか出てくるわけですが、その中で主なグループは東亜会と同文会。東亜会は言論中心に政策論を語り。同文会はそこまで行かなくて、もう少し落ち着いて、2 国間の研究あるいは交流をするという考えの組織で、近衛篤麿はこの同文会のトップに立っているわけです。両組織ともお金がない。文科省にお金を要請したら、同じような団体が 2 つあって別々に払うのもなんだからと、一括合併をしてこいということで、2 つが合併したのです。そのときに同文会リーダーである篤麿公を代表に選んで東亜同文会を設立した。同文会はそのときの清国において、日本で言う明治維新のようなことをやろうとしたトップのリーダーたち、康有為や梁啓超ら清国の近代化をめざし、清国から追われた有名な人がおります。そういう連中も加入させるべきだという主張をするのですが、近衛篤麿公はそういう清国の反政府的な連中に入れるべきでないと主張します。もし、入れてしまったら、東亜同文会そのものが清国から敵視されてしまうからだ。最後には、近衛篤麿がヨーロッパへ行き、非常にグローバルな視点から、東アジアを見ていたことが言えるかと思えます。

そして東京同文書院の話に入ってきますけれども、お配りしたプリントにグラフを書いております。当時、多くの清国学生が、東京

表 2 東京同文書院と生徒数の変化

東京同文書院

最初日白中学校に併設したが、明治三十四年(一九〇一)二月、すなわち上海に東京同文書院を開設した。赤坂御所の校舎に移転、至三十五神田錦町に移し、同文書院理事長(近衛)が校長を兼務した。教科内容は漢学・国文学・漢文・日本書・英文・算数・地理・歴史・物理化学を教える。課程は二年であった。明治三十四年(一九〇一)から大正十一年(一九二二)まで二十余年間存続し、合計八百六十四名の卒業生を出している。年平均約四十名であるが、日中関係の悪化を反映し、別表の通り年によって増減がはなはだしい。すなわち明治四十一年(一九〇八)には日清戦争の影響で、東京同文書院に在籍する清国留学生は零である。

東京同文書院に在籍する清国留学生年表

年	度	卒業生数	年	度	卒業生数
明治三十四年	一九〇一	二九	大正十一年	一九二二	二〇
三十五年	一九〇二	二八	十二年	一九二三	二〇
三十六年	一九〇三	二八	十三年	一九二四	二〇
三十七年	一九〇四	二八	十四年	一九二五	二〇
三十八年	一九〇五	二八	十五年	一九二六	二〇
三十九年	一九〇六	二八	十六年	一九二七	二〇
四十一年	一九〇八	二八	十七年	一九二八	二〇
四十三年	一九一〇	二八	十八年	一九二九	二〇
四十四年	一九一一	二八	十九年	一九三〇	二〇
四十五年	一九一二	二八	二十年	一九三一	二〇
四十六年	一九一三	二八	二十一年	一九三二	二〇
四十七年	一九一四	二八	二十二年	一九三三	二〇
四十八年	一九一五	二八	二十三年	一九三四	二〇
四十九年	一九一六	二八	二十四年	一九三五	二〇
五十年	一九一七	二八	二十五年	一九三六	二〇
五十一年	一九一八	二八	二十六年	一九三七	二〇
五十三年	一九二〇	二八	二十七年	一九三八	二〇
五十四年	一九二一	二八	二十八年	一九三九	二〇
五十五年	一九二二	二八	二十九年	一九四〇	二〇
五十六年	一九二三	二八	三十年	一九四一	二〇
五十七年	一九二四	二八	三十一	一九四二	二〇
五十八年	一九二五	二八	三十二	一九四三	二〇
五十九年	一九二六	二八	三十三	一九四四	二〇
六十年	一九二七	二八	三十四	一九四五	二〇
六十年	一九二八	二八	三十五	一九四六	二〇
六十年	一九二九	二八	三十六	一九四七	二〇
六十年	一九三〇	二八	三十七	一九四八	二〇
六十年	一九三一	二八	三十八	一九四九	二〇
六十年	一九三二	二八	三十九	一九五〇	二〇
六十年	一九三三	二八	四十	一九五一	二〇
六十年	一九三四	二八	四十一	一九五二	二〇
六十年	一九三五	二八	四十二	一九五三	二〇
六十年	一九三六	二八	四十三	一九五四	二〇
六十年	一九三七	二八	四十四	一九五五	二〇
六十年	一九三八	二八	四十五	一九五六	二〇
六十年	一九三九	二八	四十六	一九五七	二〇
六十年	一九四〇	二八	四十七	一九五八	二〇
六十年	一九四一	二八	四十八	一九五九	二〇
六十年	一九四二	二八	四十九	一九六〇	二〇
六十年	一九四三	二八	五十	一九六一	二〇
六十年	一九四四	二八	五十一	一九六二	二〇
六十年	一九四五	二八	五十二	一九六三	二〇
六十年	一九四六	二八	五十三	一九六四	二〇
六十年	一九四七	二八	五十四	一九六五	二〇
六十年	一九四八	二八	五十五	一九六六	二〇
六十年	一九四九	二八	五十六	一九六七	二〇
六十年	一九五〇	二八	五十七	一九六八	二〇
六十年	一九五一	二八	五十八	一九六九	二〇
六十年	一九五二	二八	五十九	一九七〇	二〇
六十年	一九五三	二八	六十	一九七一	二〇
六十年	一九五四	二八	六十一	一九七二	二〇
六十年	一九五五	二八	六十二	一九七三	二〇
六十年	一九五六	二八	六十三	一九七四	二〇
六十年	一九五七	二八	六十四	一九七五	二〇
六十年	一九五八	二八	六十五	一九七六	二〇
六十年	一九五九	二八	六十六	一九七七	二〇
六十年	一九六〇	二八	六十七	一九七八	二〇
六十年	一九六一	二八	六十八	一九七九	二〇
六十年	一九六二	二八	六十九	一九八〇	二〇
六十年	一九六三	二八	七十	一九八一	二〇
六十年	一九六四	二八	七十一	一九八二	二〇
六十年	一九六五	二八	七十二	一九八三	二〇
六十年	一九六六	二八	七十三	一九八四	二〇
六十年	一九六七	二八	七十四	一九八五	二〇
六十年	一九六八	二八	七十五	一九八六	二〇
六十年	一九六九	二八	七十六	一九八七	二〇
六十年	一九七〇	二八	七十七	一九八八	二〇
六十年	一九七一	二八	七十八	一九八九	二〇
六十年	一九七二	二八	七十九	一九九〇	二〇
六十年	一九七三	二八	八十	一九九一	二〇
六十年	一九七四	二八	八十一	一九九二	二〇
六十年	一九七五	二八	八十二	一九九三	二〇
六十年	一九七六	二八	八十三	一九九四	二〇
六十年	一九七七	二八	八十四	一九九五	二〇
六十年	一九七八	二八	八十五	一九九六	二〇
六十年	一九七九	二八	八十六	一九九七	二〇
六十年	一九八〇	二八	八十七	一九九八	二〇
六十年	一九八一	二八	八十八	一九九九	二〇
六十年	一九八二	二八	八十九	二〇〇〇	二〇
六十年	一九八三	二八	九十	二〇〇一	二〇
六十年	一九八四	二八	九十一	二〇〇二	二〇
六十年	一九八五	二八	九十二	二〇〇三	二〇
六十年	一九八六	二八	九十三	二〇〇四	二〇
六十年	一九八七	二八	九十四	二〇〇五	二〇
六十年	一九八八	二八	九十五	二〇〇六	二〇
六十年	一九八九	二八	九十六	二〇〇七	二〇
六十年	一九九〇	二八	九十七	二〇〇八	二〇
六十年	一九九一	二八	九十八	二〇〇九	二〇
六十年	一九九二	二八	九十九	二〇一〇	二〇
六十年	一九九三	二八	百	二〇一一	二〇
六十年	一九九四	二八	百一	二〇一二	二〇
六十年	一九九五	二八	百二	二〇一三	二〇
六十年	一九九六	二八	百三	二〇一四	二〇
六十年	一九九七	二八	百四	二〇一五	二〇
六十年	一九九八	二八	百五	二〇一六	二〇
六十年	一九九九	二八	百六	二〇一七	二〇
六十年	二〇〇〇	二八	百七	二〇一八	二〇
六十年	二〇〇一	二八	百八	二〇一九	二〇
六十年	二〇〇二	二八	百九	二〇二〇	二〇
六十年	二〇〇三	二八	百十	二〇二一	二〇
六十年	二〇〇四	二八	百十一	二〇二二	二〇
六十年	二〇〇五	二八	百十二	二〇二三	二〇
六十年	二〇〇六	二八	百十三	二〇二四	二〇
六十年	二〇〇七	二八	百十四	二〇二五	二〇
六十年	二〇〇八	二八	百十五	二〇二六	二〇
六十年	二〇〇九	二八	百十六	二〇二七	二〇
六十年	二〇一〇	二八	百十七	二〇二八	二〇
六十年	二〇一一	二八	百十八	二〇二九	二〇
六十年	二〇一二	二八	百十九	二〇三〇	二〇
六十年	二〇一三	二八	百二十	二〇三一	二〇
六十年	二〇一四	二八	百二十一	二〇三二	二〇
六十年	二〇一五	二八	百二十二	二〇三三	二〇
六十年	二〇一六	二八	百二十三	二〇三四	二〇
六十年	二〇一七	二八	百二十四	二〇三五	二〇
六十年	二〇一八	二八	百二十五	二〇三六	二〇
六十年	二〇一九	二八	百二十六	二〇三七	二〇
六十年	二〇二〇	二八	百二十七	二〇三八	二〇
六十年	二〇二一	二八	百二十八	二〇三九	二〇
六十年	二〇二二	二八	百二十九	二〇四〇	二〇
六十年	二〇二三	二八	百三十	二〇四一	二〇
六十年	二〇二四	二八	百三十一	二〇四二	二〇
六十年	二〇二五	二八	百三十二	二〇四三	二〇
六十年	二〇二六	二八	百三十三	二〇四四	二〇
六十年	二〇二七	二八	百三十四	二〇四五	二〇
六十年	二〇二八	二八	百三十五	二〇四六	二〇
六十年	二〇二九	二八	百三十六	二〇四七	二〇
六十年	二〇三〇	二八	百三十七	二〇四八	二〇
六十年	二〇三一	二八	百三十八	二〇四九	二〇
六十年	二〇三二	二八	百三十九	二〇五〇	二〇
六十年	二〇三三	二八	百四十	二〇五一	二〇
六十年	二〇三四	二八	百四十一	二〇五二	二〇
六十年	二〇三五	二八	百四十二	二〇五三	二〇
六十年	二〇三六	二八	百四十三	二〇五四	二〇
六十年	二〇三七	二八	百四十四	二〇五五	二〇
六十年	二〇三八	二八	百四十五	二〇五六	二〇
六十年	二〇三九	二八	百四十六	二〇五七	二〇
六十年	二〇四〇	二八	百四十七	二〇五八	二〇
六十年	二〇四一	二八	百四十八	二〇五九	二〇
六十年	二〇四二	二八	百四十九	二〇六〇	二〇
六十年	二〇四三	二八	百五十	二〇六一	二〇
六十年	二〇四四	二八	百五十一	二〇六二	二〇
六十年	二〇四五	二八	百五十二	二〇六三	二〇
六十年	二〇四六	二八	百五十三	二〇六四	二〇
六十年	二〇四七	二八	百五十四	二〇六五	二〇
六十年	二〇四八	二八	百五十五	二〇六六	二〇
六十年	二〇四九	二八	百五十六	二〇六七	二〇
六十年	二〇五〇	二八	百五十七	二〇六八	二〇
六十年	二〇五一	二八	百五十八	二〇六九	二〇
六十年	二〇五二	二八	百五十九	二〇七〇	二〇
六十年	二〇五三	二八	百六十	二〇七一	二〇
六十年	二〇五四	二八	百六十一	二〇七二	二〇
六十年	二〇五五	二八	百六十二	二〇七三	二〇
六十年	二〇五六	二八	百六十三	二〇七四	二〇
六十年	二〇五七	二八	百六十四	二〇七五	二〇
六十年	二〇五八	二八	百六十五	二〇七六	二〇
六十年	二〇五九	二八	百六十六	二〇七七	二〇
六十年	二〇六〇	二八	百六十七	二〇七八	二〇
六十年	二〇六一	二八	百六十八	二〇七九	二〇
六十年	二〇六二	二八	百六十九	二〇八〇	二〇
六十年	二〇六三	二八	百七十	二〇八一	二〇
六十年	二〇六四	二八	百七十一	二〇八二	二〇
六十年	二〇六五	二八	百七十二	二〇八三	二〇
六十年	二〇六六	二八	百七十三	二〇八四	二〇
六十年	二〇六七	二八	百七十四	二〇八五	二〇
六十年	二〇六八	二八	百七十五	二〇八六	二〇
六十年	二〇六九	二八	百七十六	二〇八七	二〇
六十年	二〇七〇	二八	百七十七	二〇八八	二〇
六十年	二〇七一	二八	百七十八	二〇八九	二〇
六十年	二〇七二	二八	百七十九	二〇九〇	二〇
六十年	二〇七三	二八	百八十	二〇九一	二〇
六十年	二〇七四	二八	百八十一	二〇九二	二〇
六十年	二〇七五	二八	百八十二	二〇九三	二〇
六十年	二〇七六	二八	百八十三	二〇九四	二〇
六十年	二〇七七	二八	百八十四	二〇九五	二〇
六十年	二〇七八	二八	百八十五	二〇九六	二〇
六十年	二〇七九	二八	百八十六	二〇九七	二〇
六十年	二〇八〇	二八	百八十七	二〇九八	二〇
六十年	二〇八一	二八	百八十八	二〇九九	二〇
六十年	二〇八二	二八	百八十九	二一〇〇	二〇
六十年	二〇八三	二八	百九十	二一〇一	二〇
六十年	二〇八四	二八	百九十一	二一〇二	二〇
六十年	二〇八五	二八	百九十二	二一〇三	二〇
六十年	二〇八六	二八	百九十三	二一〇四	二〇
六十年	二〇八七	二八	百九十四	二一〇五	二〇
六十年	二〇八八	二八	百九十五	二一〇六	二〇
六十年	二〇八九	二八	百九十六	二一〇七	二〇
六十年	二〇九〇	二八	百九十七	二一〇八	二〇
六十年	二〇九一	二八	百九十八	二一〇九	二〇
六十年	二〇九二	二八	百九十九	二一一〇	二〇
六十年	二〇九三	二八	百	二一一一	二〇
六十年	二〇九四	二八	百一	二一一二	二〇
六十年	二〇九五	二八	百二	二一一三	二〇
六十年	二〇九六	二八	百三	二一一四	二〇
六十年	二〇九七	二八	百四	二一一五	二〇
六十年	二〇九八	二八	百五	二一一六	二〇
六十年	二〇九九	二八	百六	二一一七	二〇
六十年	二一〇〇	二八	百七	二一一八	二〇
六十年	二一〇一	二八	百八	二一九九	二〇
六十年	二一〇二	二八	百九	二二〇〇	二〇
六十年	二一〇三	二八	百十	二二〇一	二〇
六十年	二一〇四	二八	百十一	二二〇二	二〇
六十年	二一〇五	二八	百十二	二二〇三	二〇
六十年	二一〇六	二八	百十三	二二〇四	二〇
六十年	二一〇七	二八	百十四	二二〇五	二〇
六十年	二一〇八	二八	百十五	二二〇六	二〇
六十年	二一〇九	二八	百十六	二二〇七	二〇
六十年	二一〇	二八	百十七	二二〇八	二〇
六十年	二一〇一	二八	百十八	二二〇九	二〇
六十年	二一〇二	二八	百十九	二二一〇	二〇
六十年	二一〇三	二八	百二十	二二一一	二〇
六十年	二一〇四	二八	百二十一	二二一二	二〇
六十年	二一〇五	二八	百二十二	二二一三	二〇
六十年	二一〇六	二八	百二十三	二二一四	二〇
六十年	二一〇七	二八	百二十四	二二一五	二〇
六十年	二一〇八	二八	百二十五	二二一六	二〇
六十年	二一〇九	二八	百二十六	二二一七	二〇
六十年	二一〇	二八	百二十七	二二一八	二〇
六十年	二一〇一	二八	百二十八	二二一九	二〇
六十年	二一〇二	二八	百二十九	二二二〇	二〇
六十年	二一〇三	二八	百三十	二二二一	二〇
六十年	二一〇四	二八	百三十一	二二二二	二〇
六十年	二一〇五	二八	百三十二	二二二三	二〇
六十年	二一〇六	二八	百三十三	二二二四	二〇
六十年	二一〇七	二八	百三十四	二二二五	二〇



図 28 旧荒尾精宅 (京都 東山)

同文書院を作って具体化しており、それが東亜同文書院に発展したという図であります。これも裏側のプリントに記載していますので、ご覧になってください (図 27)。

もう一つ、先ほどの荒尾精は、近衛篤磨公があちこち動き回ってる最中に台湾で急に亡くなってしまったのです。38 歳でした。東亜同文書院の院長をかつての同僚の根津一にまかせ、ずっとやってもらうことになりますが、自分が今度は、日本と清国だけではなくて台湾が日本の植民地になりましたから、台湾はじめ、南方での貿易取引の拡大を目指したいと台湾へ渡った 3 日目、ペストに侵されて亡くなってしまい、日本中がびっくりしたわけです。その荒尾精の死を悼んで、のちに篤磨公が碑文を作った。これは京都の荒尾精の住んでおられた東山の一角です (図 28)。そのところに建てられたものです。これは大きな碑であったので、ほったらかしにしてあったから、苔むして永く読めなかったのですけれど、平成 16 年、直前ですね。金沢にお住まいの三田さんが、息子さんと一緒に拭き掃除で全部苔落としていただき、きれいにして読めるようにし (図 29)、その平成 16 年に、みんなでここでお参りをしたのです。近衛篤磨公は、荒尾精を非常に高く評価していたんです。これはそのときの写真です (図 30)。

## 7. 東亜同文会と東亜同文書院

図 30 はこの時代に集まった方々の写真で



図 29 京都・荒尾精碑への参拝 (1)。左が碑



図 30 京都・荒尾精への参拝 (2)。右は九烈士の墓

す。下のほうの写真にはもう 1 つ碑が建っていますが、これが九烈士の墓であります。荒尾としては、自分が日清貿易研究所で教えた有能な連中の中の 9 人が日清戦争で亡くなってしまった。それを悼んで、こういう碑を作ったのです。これが、今はもうほかの人のお宅になっていますけども、東方斎先生の庵。これは荒尾精の家があったところであります (前掲図 28)。

こうして東亜同文書院が学校として具体化していくわけですが、その経営母体の話です。東亜同文会です。会長は近衛篤磨公であります。副会長、長岡護美。ほか幹事長、理事長、以下、ずっと並んでいます。この幹事長、理事長に見られたとおり、佐藤正さんという名前がみえます (表 3)。今日はお孫さんの佐藤泰彦さんがお見えですね。上海中学を卒業された方です。佐藤正さんは、この佐藤泰彦さんの祖父です。佐藤正さんは日清戦争で活躍し、南京同文書院の院長役を最初やる予定で

表3 当初の東亜同文会役員人事表

あったのです。ところが軍部のほうからの反対があつて、それで引き受けられなかったのです。しかし、南京同文書院のカリキュラム案をつくられたりしていました。もう時間が迫っており、先へ急ぎます。

これは、南京同文書院です。ここは、どんなふうな形で学校を作ったかということです。一番最初の清国での日清共同の学校でありました。先生の数も非常に当時は少なかったです。しかし、南京同文書院ができて半年、義和団の乱が起こると、都が南京でしたから、それが攻められるというわけで租界のある上海へ逃げ込むのです。その逃げ込んだ先で、先ほどの荒尾精が構想を持った東亜同文書院と合体をして学校のほうも東亜同文会と同じように東亜同文書院という名前が誕生したのであります。これが南京同文書院の最初の卒業生の人たちであります(図31)。この中からも非常に有能な人が出ております。

そして、東亜同文書院が開設した場所は少し前に上海万博が行われた少し南のほうの場



図31 南京同文書院生



図32 東亜同文書院開院式

所です。そこで東亜同文書院の開院式、始業式を行います(図32)。一番左に立っている方が根津一院長。東亜同文書院の1901年、開学当時の状況がこれです。先ほど説明した日清貿易研究所に比べると、もう一回り広がってます。これは最初の年ですけど、もうあと半年後、あるいは1年後ぐらいになりますと、これがもっと整理されていきます。これもやっぱり清国との間の貿易実務を行うビジネススクールとしての科目で埋め尽くされているのですね(表4)。特に語学は清国語週12時間、英語は8時間というような形で重点的に教育されて、徹底的に中国語をマスターさせています。清国人の中間業者(買弁)を通さなくて生産者たちとの直接取引をめざしたためです。

表4 東亜同文書院カリキュラムと教員

もう一つ、このカリキュラムには、きちっとした形では載っていないんですけど、その後の「大旅行」は最初は修学旅行だったんです。ここではこれ以上ふれません。

これが、最初のころの書院の入学生(図33)。





図 33 東京での東亜同文書院入学生の招見式



図 34 図 33 の前列拡大図 (中央近衛、左根津)

全国から集まって東京の、これは華族会館ですね。その前で集合したときの写真。その真ん中に、やっぱり近衛篤磨公が。根津院長が次 (図 34)。はい、拡大写真でありまして。このころまでは近衛さんは非常に元気でありました。はい。そしてそのあと、北海道へ再び陸路の旅をしています。これは日清戦争後、ロシアが南下してきて満州を占領してしまった。一次、二次、何回も撤退するという約束をしながら出ていかない。これらのことを踏まえて、近衛篤磨公は次第に対露戦略が非常に重要だとして、同盟会を作ったり、対ロシ



図 35 篤磨による 2 回目の北海道コース



図 36 退院時に撮られた篤磨一家

アの組織を作ったりとか、いろいろな対応をしていくわけです。それであらかじめ北海道の視察をしたわけです。(図 35)

一方、海路も気になる。前に比べるとよくなったけれども、まだまだここは未開の地で、非常に有望であると。鉄道も少ししかないのです。まだまだ歩いて行くところが結構あったりしております。これもロシア側のシベリア鉄道、さらに東清鉄道が開通したときに北海道の持つ意味がもっと大きくなると考えたのです。そういう点でも北海道、早く整備した空間にしていく必要があるということを盛んに主張するようになります。

そうして、その直後、これは篤磨公が左胸に痛みを感じて、調子が悪くなるのです。病院へ入ったり出たりするのです。かなり重症だったときに、一旦少し回復の兆しがあると、言われて自宅へ戻られたときの写真です。これが篤磨公の写っている最後の写真ですね

(図 36)。一番左側が文磨さんで、前の奥さんのお子さんです。奥さんは彼を生んだあと亡くなったのです。右方が 2 番目の奥さんで亡くなった実さんの妹さんで、4 人のお子さんをもうけました。このあと、篤磨公は入院し半年足らずで亡くなってしまいます。

今は、お墓が京都と日暮里にあります。こういうふうに祀られているわけです。これは孫文が篤磨公を惜しんで、お墓参りしたときの写真 (図 37) です。

これは歴代の東亜同文書院の院長です。根津一から最後、愛知大学を作った本間喜一



図 37 孫文による篤磨公への墓参



図 38 歴代の書院院長と左下は上海での文隆（前列右から2人目）を囲んだ会

で（図 38）。篤磨の息子の文磨公も総理大臣をやっているときに院長を兼任していました。しかし、上海の東亜同文書院に来たのは2回しかないのです。その息子の文隆はアメリカから帰ってきたあと、書院に事務員として手伝いに来た後、軍隊に入ります。これはアメリカから帰国後、上海の同文書院 30 周年を迎えたお祝いの会に出席したときの近衛文隆の写真です（図 38）。彼が上海に寄ったことは、いろいろな記録に残っていますが、彼自身の顔写真が写っているのが、見つからなく、これが一番いいかなと思って、これを持ってきました。

これが、書院その後の流れです。篤磨公が亡くなったあと、書院はずっとこういう形で校舎を移転しますが、新キャンパスの 1920～1930 代が最盛期でした（図 39）。第 2 次上海事変で校舎が焼かれ、上海交通大学を借用、最後の年は富山県呉羽に分校をつくり、最後の新生を迎えます。そして終戦。戦争で学業中途になった学生たちの受入れ校として豊橋に愛知大学をつくりました。



図 39 東亜同文書院正門と本館（除家瀬）

## 8. 愛知大学と近衛家

愛知大学はその後、同文書院を継承している部分としては、東亜同文会の図書や資産の受け入れ、近衛家を理事に迎えたわけです。そして、これは、長いこと愛知大学の理事をやっておられた通隆さんの写真です（図 40）。一番上は、お正月にやります賀詞交換会で、あいさつをされたり談笑しているところです。こういった会はにぎにぎしく行われておりました。



図 40 滬友会の賀詞交換会での通隆氏

これは、卒業生の中島寛司さんからご提供いただいた「近衛家三代をしのぶ会」の時の写真です（図 41）。私、これも参加したかったのですが、イギリス留学中のため参加できなかったのです。それから、毎年、東亜同文書院関係で功績のあった人を表彰するという東亜同文書院記念基金会授賞式があります。このときは、そのすぐ隣に女性がおられまして、工藤美代子さんという方で、近衛文磨公に関する書物（ノンフィクション）で受賞されました。文磨公は東京裁判の前日に自殺し



図 41 「近衛家三代を偲ぶ会」

てしまった人ですけど、それをめぐって、いろいろ論評があります。本当はこうではなかったのかという作品を書かれて、授賞式の対象になったわけであります。すぐ隣、背の高い方が近衛通隆さんで愛知大学の理事であります（図 41）。私もよく霞山ビルや文部省へ行ったのですが、文部省に向かう通りで背の高い人が「おう」と言って、あいさつしてくれたことが何度かあったことを思い出します。また、愛大卒業生たちとの定期的なゴルフの大会を年 2 回ぐらい、豊橋や豊川、新城へ来て、懇親会で盛り上がっていました。近衛家が、愛知大学の一面にあったということがお分かりいただけたと思います。

## 9. おわりに

近衛通隆さんは、数年前に亡くなられてしまいました。しかし、数日前に中日新聞を見ましたら、ニュー近衛さんの記事がありびっくりしたのですが。国際赤十字連盟の近衛会長が紹介されていました（図 42）。お名前が忠輝さんです。文麿さんの娘さんの息子さんです。この方が近衛家をこれから引き継いでいくのだろうかというふうに思われます。また愛知大学との関係性が、もてる可能性もあるのではないかと思います。

いずれにしても近衛家とアジアそして愛知大学との関係は、こういう形でずっとつながってきていることをご理解いただければと思います。



図 42 近衛忠輝氏記事